

JELA NEWS

ジェラニュース 第40号 2016年8月15日発行 発行責任者 森川 博己

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)研修講座／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしか飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。 マタイによる福音書25章35～36、40節



カンボジア水プロジェクト、3年ごしで完成！

ひとりの寄付がカンボジアの農村にもたらした変化についてご紹介します。JELAは、カンボジアの連携組織である Life with Dignity (LWD) と共に、現地に水供給プロジェクトを立ち上げ取り組んで参りました。詳しい報告は、2頁以降をご覧ください。

【この号にはこんな記事が】

ひとりの寄付がカンボジアの農村にもたらした変化 —— 2～3 政治経済的視点を踏まえた難民保護 第三回 ドイツの実践から (1) (有馬みき) —— 4 福島で屋内遊戯スペースを提供する団体の支援を開始／ブラジル子ども支援報告／熊本地震被災者に対する支援について —— 5～6 世界の子ども支援チャリティコンサート 2016 報告／2017年インド・ワークキャンプのお知らせ —— 7 新理事長あいさつ／第7回川柳ひろば入選句発表／支援者一覧ほか —— 8

ひとりの寄付がカンボジアの農村にもたらした変化



本紙第 31 号（2013 年 8 月発行）に、水が自由に使えず困っているカンボジア農村の記事を載せました。これをご覧になった A さん（仮名）から「村に水を引くのいくらかかりますか」と問い合わせがあり、費用をお知らせしたところ、全額を寄付してくださいました。これまでに JELA が個人からいただいた寄付としては、類のない高額でした。

この貴いご寄付に感謝し、カンボジアの連携組織である Life with Dignity (LWD) と共に、現地に水供給プロジェクトを立ち上げました。以下は、完成までに 3 年を要したプロジェクトによって村にもたらされた変化の概要です。



つまずき

まずは JELA 関係者数名で対象となる村を再訪し、水源・高度・資材などの確認を行い、データを突き合わせた結果、意味のあるプロジェクトが成り立つことがわかりました。

安心もつかの間、ある日突然、この村に武装州兵が現れ、村民を威嚇しはじめました。水源となる山が二つの農村（一つは JELA のプロジェクトを実施する村）にまたがっていたのです。JELA のプロジェクトは、別の村ですぐに話題になったようです。ところが、二つの村は仲が悪く、両村民・州兵が衝突しかねない事態を招いたのです。争いの裏には中国企業の横やりもありました。彼らは同地でサトウキビなどを栽培し、その加工工場を作る計画をしていました。それには水が必要です。水源の存在を知って役人と接触し、水源を含む土地の借地契約を役所と勝手に結んだというのです。

これに追い打ちをかけたのが村民の流出。170 世帯（450 人）が暮らしていましたが、州兵の威嚇後は半数以下の 76 世帯（人数不明）になります。人口が減り、土地争いも収まる気配がなく、プロジェクトは暗礁に乗り上げました。

計画変更

この地でのプロジェクトを断念する旨を A さんに伝えると、「アジアのこういった地域では珍しくないことです」と理解を示してくださいました。場所を変えて計画の練り直しです。土地紛争のリスクのない農村を探してもらったところ、水問題を抱えた二つの村からなる、貧困世帯数 266、人口 1,181 人（うち、子ども 430 人）という地域が見つかりました。人口は前の村のほぼ 3 倍です。

ただし今度は、高所に給水塔を設置し、両村にまたがる湖から水を汲み上げて貯め、そこから各家庭に水道を引くと

いう大がかりなものです。予算も増えました。A さんの寄付金だけでは足りなくなり、JELA の資金も加えて建設費を賄うことにしました。土地紛争がないことの確証を得るために、両村と、両村が属する州から、「ここには土地紛争は存在しない」という公的文書を発行してもらいました。

村民の協力

当初の予定では給水塔の高さは 6 メートルでしたが、現地専門家による計算の結果、12 メートル必要なことが判明しました。そうすると、工事費も増加します。それでも計画が遂行できたのは、村民たちの努力の賜物でした。一人ひとりが月収の半分にあたる費用を出しあい、計画を支えることを了承してくれたのです。加えて、電気設備などの費用を賄うため、追加分担にも同意してくれました。支援を受けるだけでなく、自らも負担して給水システムを完成し維持していきたいという熱意を感じさせる出来事でした。

工事の最終段階で JELA は再度現地に赴き、給水塔の建築監査・維持管理について助言しました。この時に村民からは、「（ひとりでたくさんの寄付をしてくれた）A さん、JELA、LWD の皆さんありがとう！」と感謝の声があがったそうです。



プロジェクトがもたらした変化

給水システムは 2016 年 3 月に完成。それまで地域の人々にとって、生活や家畜・農業用の、安くて十分な量の水を確保することは大変なことでした。水を得る

ために多くの時間を費やさざるをえないため、収入を得る労働の機会を奪われてきたのです。プロジェクトの完成によって、大人は水を得るための労働から解放されました。子どもたちも水汲みの仕事から解放され、定期的に学校に通えるようになりました。

以前は 50 リットルの水を得るのにも 1 ミドル必要だった（そして、あまり多くの水が手に入らなかった）のに、今は、千リットルの水をわずか 0.5 ミドルで得られるようになった（お金さえ出せば、この何倍もの水が得られる）のですから、大きな変化です。

生活の改善・環境への理解

村民の家にトイレは以前からありましたが、水不足のため常用できず、屋外での排泄を余儀なくされてきました。しかし今は、家の中でトイレが利用できます。入浴の回数も増えました。さらに、十分な水量のおかげで乾季にも野菜を栽培できるようになりました。これが健康的な食生活に結びつき、野菜の販売で収入も増えるなど、人々の生活が大幅に改善されました。



日々の生活に追われていた村民ですが、水プロジェクトの説明会を通じ、森林と水と人間の関係がわかるようになりました。そして、水を守るための森林保護に多くの人が関わるようになりました。それが水資源維持に役立つことを理解したからです。自然のサイクルを知り、自然を守る活動を実践することは、途上国では稀なことでしょう。

プロジェクトに関われたことへの感謝

これらの事実を A さんにお伝えしたとこ

ろ、次のようなお返事をいただきました。

「266 世帯（おそらく千人以上）の人たちがきれいな水を飲めるようになったとのこと、ご報告を感謝して読ませていただきました。また予想していなかったことですが、この設備ができたゆえに、子どもたちは定期的に学校に通えるようになったとのこと。思いがけないことでした。衛生状態の改善しか考えておりませんでした。教育を受ける機会が増えれば、人生の可能性や生活の質が変わるでしょうし、無用な争いも減ることでしょう。水だけで未来が変わるのですね。このようなプロジェクトに関わらせていただけたことを、心から神様に、そして実際に働かれた皆様に感謝します。このご報告だけで、私は涙が出るほど喜んでおります。天にて主にお会いしたとき、きっと『私が渴いたときに、お前は水を飲ませてくれた』（注）と言ってくださることでしょう」。

（注）イエス・キリストの言葉。「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をし



ていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」（マタイによる福音書 25 章 35 ～ 36 節。新共同訳聖書）

水プロジェクトがカンボジアの農村にもたらした大きな変化は、A さんの寄付が発端でした。カンボジアには、水が十分に使えない貧しい農村が他にもたくさんあります。JELA は現地の団体と協力して、このような形で皆様の寄付金が有意義に、そして有効に用いられるようにいたします。

記事をお読みになってご興味をお持ちになった方、ご支援をご検討いただけます方は、JELA（カンボジア支援担当）まで、お気軽にお問い合わせください。どうぞよろしくお願いいたします。



東京大学大学院総合文化研究科特任研究員
神奈川大学法学研究所 客員研究員
有馬みき

これまでの本連載では、人々が法を守るための工夫の必要性が論じられてきました。難民保護についても、単なる理想論を掲げるだけではなく、人々の利害や損得勘定を踏まえた上での議論が必要だということです。今回と次回は、そのような視点からドイツの具体例をご紹介します。

■大量の難民受け入れ

ドイツでは、2015 年の一年間だけで 47 万 6649 人が難民申請を行い、難民としての保護を求めました。このような申請があると、担当機関での聞き取り調査等を通して申請者が難民であるかどうかを確認する作業が行われるのが通常で、これが難民認定手続と呼ばれるものです。2015 年のドイツでは、この手続を終えた人の 48.5% にあたる約 13 万 7000 人が難民の地位を付与されました。これに対し、同じ一年間に日本で行われた難民申請は 7586 人、難民として認められたのは審査を終えた人の 0.55% にあたる 19 人でした（日独とも一次審査の統計。取り下げは除く）。日本国内だけでみると申請数は前年比約 50% の増加であり急増を危惧する声もありますが、ドイツと比べると、いかに日本では難民申請も難民認定も少ないかが際立ちます。

しかし、日本で難民支援に少しでも関わってみると、申請中の人を含め、難民

のニーズに対してなかなかケアが行き届かない厳しい現実を目の当たりにするのでもた事実です。世界第三の経済大国である日本であっても比較的少数の難民のケアに四苦八苦しているのに、ドイツはいったいどうやって年間 50 万人近くの難民申請者に対応しているのでしょうか。町は保護を求める人々で溢れかえり、さぞ混乱しているに違いない、そんな風に思っていました。

ところが 2016 年 2 月末にドイツに調査に行ってみると、意外なことに、駅や道端で寝泊まりしたり、たむろしたりしているような難民はどこにも見当たりませんでした。既にさまざまな受け入れ施設ができており、衣食住や教育が提供されていたのです。ちなみにここでいう「受け入れ」は広い意味で使われており、難民であることが確認された人、すなわち難民認定された人の定住を認めて保護することにとどまりません。まだ難民かどうかははっきり分らない申請中の人や、さらには申請前の人まで含めて、最低限の生活が保障されるよう、受け入れ施設が各地に整備されていたのです。ドイツは効率性が有名ですが、昨夏の移民難民の大量流入からわずかに半年あまりでここまです実現してしまうとは、「さすがドイツ」と感心せざるを得ませんでした。

もちろん、すべてが完璧なわけではありません。ミュンヘンで訪れた施設では、家族は個室に滞在する一方で、単身の男性たちは、工場の一部に仕切りもなくずらりと並べられた簡易二段ベッドで寝泊まりしていました。また、今回の調査訪問時に情勢が比較的落ち着いていた大きな理由には、ドイツに至るまでに難民が通過しなければならない国々が国境管理を厳しくしたために、難民の流入が

大幅にペースダウンしたということがあります。ドイツでも右派勢力が台頭し、国民は二極化していると言われています。このように問題点は多々あるとしても、実際のところ何がこれほどまでの受け入れを可能にしているのでしょうか。

■受け入れに積極的な政策

ドイツでこれだけの規模の難民保護が実現されたのにはさまざまな理由があります。まずは政治的・歴史的な背景です。ナチス時代の経験を教訓として、戦争や迫害に苦しむ市民に手を差し伸べるということがドイツの「理念」の一つとなっているのです。メルケル首相は難民受け入れを「人道的責任」と位置付けました。これはドイツ最大の宗教であるキリスト教の教えにもかなうものでしょう。

しかし政治の世界は理念だけで動くものではありません。ドイツのある議会スタッフは、メルケル氏は以前から難民に寛容な政策をとっていたわけではなく、世論の流れをつかむのに長けているだけだと評しました。たしかに昨年夏にドイツがシリア難民を受け入れる方針を発表したときには各地で驚きと賞賛の渦が巻き起こり、メルケル氏は米誌タイムと英紙フィナンシャル・タイムズの「今年の人」にも選ばれました。その後、世論の評価が分かれ政治的立場が厳しくなるにつれ、メルケル氏の姿勢はより慎重になってきています。

こうしてみると、歴史観や宗教観に裏打ちされた明確な理念、強力なリーダーシップ、それを後押しする世論の高まりなどが、ドイツが当初難民の受け入れに積極的な姿勢をとるのを可能にしたといえそうです。そしてドイツ経済が好調であることも重要な要素です。

■財政的な裏付けと手続の合理化

政策を実現するためには予算の裏付けが必要です。ドイツの場合、2015 年の財政収支は 121 億ユーロ（約 1.5 兆円）の黒字でした。財務大臣は、余裕資金を移民難民の受け入れに活用するとの考えを表明しています。実際、難民受け入れにかかる経費については、受け入れ数に応じて中央政府から州政府に予算が配分され、州政府が民間福祉団体に委託してシェルターの運営などを

行っています。さらに、EU 全体の予算の中にも、庇護・移民・統合のための基金 (Asylum, Migration and Integration Fund) があり、2014 年から 2020 年までの 7 年間で総額約 31 億ユーロ（約 3,800 億円）が用意されています。ドイツの福祉団体において保護の最前線で働く人々は、ボランティアや寄付を最大限活用しつつも、あくまでも行政から委託を受けたプロフェッショナルとして受け入れに携わっているのです。

難民受け入れにかかる費用を抑えるために、申請処理も合理化されています。難民認定される見込みが高い人たちと、逆に見込みの低い人たちについて、それぞれ迅速に申請を処理できるよう、申請者は出身国によってグループ分けされています。そして難民認定される見込みが高いとされるグループの人（具体的には、シリア、イラク、南スーダン、およびエリトリア出身者）は、申請中からドイツ社会への統合を円滑化するための研修プログラムを受けることができるようになっています。出身国によっては認定にいたる前から定住をみすえた対策がなされている点は、日本と大きく異なる点です。このようなドイツの方針には公正の観点から批判もありますが、大量の難民申請を効率的に処理し財政コストや社会的コストを抑えるための極めて合理的な策といえます。

日本でも難民申請数の急増を受けて「案件処理体制の強化」が図られているところであり、今後の動きが注目されています。

ここまでは政治経済の話が中心でしたが、実際に難民を受け入れるのは地域社会です。次回は、難民がドイツ社会に馴染みやすくするためにどのような支援が行われているのかについて、社会的背景とともにご紹介していきたいと思います。



施設職員と筆者(左)

東北被災者支援

福島で屋内遊戯スペースを提供する団体の支援を開始

JELA は 2016 年度より、福島市の団体「キッズケアパークふくしま」を支援しています。市内のルーテル教会などを中心に発足した組織で、原発事故による放射線被害のため屋外で遊ぶことを控えている子どもたちやその保護者のために、屋内で安心して遊べるスペースを提供しています。現在は月に一回、市内の大きなホールを借りて遊具を搬入し、そこを子どもたちや保護者に無償で開放する「こどもあそびば」を活動の軸としており、JELA は 4 月より、この施設使用料を支援しています。

初めて JELA の支援対象となった、4 月 23 日の「第 19 回こどもあそびば」を、下川正人職員が挨拶と視察を兼ねて訪れました。以下はそのレポートです。

「こどもあそびば」の実施時間は、毎回 10 時から 14 時 30 分までです。私が到着したのは 10 時半頃でしたが、すでに大勢の子どもたちで賑わっていました。

会場となった福島県文化センターの展示室は、子どもが走り回るのに十分なスペースがあり、参加者は、日本の玩具会社、ボーネルンド社製※の大型遊具等を使ってのびのびと遊んでいました。

ボランティア人員が充実していることが「こどもあそびば」の重要な特徴で、地元の高校生・大学生ら数十人が、会場の準備をしたり、子どもの安全を確認しながら一緒に遊んだり、イベントの円滑な運営を手伝っていました。

私も少しだけ子どもたちと遊ばせてもらいました。目いっぱい体を動かしてはしゃぐ子どもの姿を見ながら、「自分が幼い子どもだったら、このように遊べるスペースが

あることはとても嬉しいことだろう」と実感し、「キッズケアパークふくしま」は本当に意義のある取り組みだと思いました。

午後は少し利用者の数が少なくなってきたので、ボランティアの方々にも話を伺うことができました。何度も参加している方も多いとのこと、それだけやりがいを感じていらっしゃるのだと思います。また初めてのボランティアに加わった方も、大変充実した時を過ごしたようでした。

ボランティアの皆さんが子どもの相手をしてくれるので、同伴された保護者の方々も自分の子どもに付きっきりでいる必要がなく、ほっと一息つくことができます。これも「こどもあそびば」の大きなメリットです。当日は 120 人の参加があったとのこと、現地の需要も大きい、大切な事業だということを再認識しました。

(下川正人)

※ボーネルンド社は、子どもの健全な成長に「あそび」がとても大切だとの考えから、あそびの道具と環境を提供することを通して、子どもの成長に寄与することを目的としている。1981 年（昭和 56 年）7 月 7 日に設立。「ボーネルンド」の名称は、デンマーク語の「børne(子ども)」と「lund(森)」から付けられている。(出典「Wikipedia」より)

今後は財的なサポートにとどまらず、子どもを見守りつつ一緒に遊ぶ青年ボランティアを首都圏から派遣するなど、人的支援も検討しています。「キッズケアパークふくしま」と、それを支援する JELA の働きのためにお願いします。



ベルリン郊外の難民受け入れ施設

ブラジル子ども支援

JELA は、リオデジャネイロにある保 育 所「Centro Social Creche Bom Samaritano (=よきサマリア人ソーシャル・センター。以下「Centro」)を2006年から支援しています。Centroは、ブラジル福音ルーテル教会の社会福祉活動の一環として1979年に設立され、カンタガーロ、パヴァンそしてパヴァンジーニョという地域のファヴェーラ（貧困地域）の子どもたちと家族を支えてきました。

これまでJELAは、Centroの子どもたちのために制服の寄贈、食費の一部負担、遊具の提供やエアコンの寄贈などの支援を行ってきました。今年は、Centroの施設修繕プロジェクトを支援しました。

Centroのディレクターを務めるビルマ・ペッシ氏から感謝の報告が届きましたので、以下にご紹介いたします。

Centroには、現在100人の幼児がおり、その子たちの教育・栄養補給・健康の支援と、社会復帰を目指す家族や保護者の支援を行っています。Centroが存在する地域の公立デイクアセンターや幼児施設は利用者が定員オーバーのため、Centroの需要が高まっています。

Centroには2～6歳児が常に100人前後通っています。これまでの活動に加え最近、先生と児童のための音楽教室を設けています。また、子どもたちとその家族のメンバーとに直接関わりを

持ち、正しい食生活を促進する栄養教育活動も拡大してきました。栄養教育は、Centroの現地協力団体から派遣されるボランティア栄養士が行っています。

施設の修繕・改修工事は、2015年末から2016年初頭にかけて行われました。この工事が可能となったのは、日本福音ルーテル社団(JELA)が約15,000レアル(約450,000円)の支援金を送ってくださったからです。修繕プロジェクトの主な内容は、食堂の扉の取り替え、教室の天井・壁の修繕と塗装です。

これらの修繕が実現したことに対して職員からは次のような感謝の声が寄せられました。保育士5年目のラファエラ・ゴメス・ダ・シルヴァさんは教室について、「清潔で明るい環境で働けるのがとても嬉しいです。設備もきれいになり、子どもたちも喜んでいます」と言っています。Centroで30年間保育士を勤めているイダールシレマ・ドス・サントス・モレイラさんは、新しい食堂の引き扉などについて、「長年あけにくくて本当に困っていましたが、今は楽に開け閉めができて嬉しいです。教室も天井や壁の色が明るくきれいになり、子どもたちに元気を与え、私も働く意欲がわきます」と述べています。

施設を修繕したことにより、より安全で明るい環境が子どもたちに提供できるようになりました。JELAの皆さまのご協力とご支援に感謝いたします。



熊本地震被災者支援

熊本地震被災者に対する JELA の支援について

2016年4月中旬に発生した熊本地震の被災者の皆様にお見舞い申し上げます。

JELAは日本福音ルーテル教会が同地震の被災者を支援するための募金に100万円を寄付いたしました。それは別に、JELA独自の支援として、関わりの深い九州学院と九州ルーテル学院の学生さんたちを支援することにしました。今回の地震のためにご家庭が経済的困難を強いられ、学業継続が難しくなっている方たちに学費の支援をするということです。

支援金は、今年度の世界の子ども支援チャリティコンサートの席上献金、米国のエキュメニカルなNGO「Lutheran Partners in Global Ministry (LPGM)」に依頼して行った募金、JELAの国際青年交流奨学金の今年度未使用分、そして熊本地震被災者支援金として皆様から頂戴したご寄付などを原資とし、総額300万円になりました。

各学校には支援が必要な生徒を選出いただき、6月20日と7月8日に森川博己事務局長が現地を訪問して対象学生と保護者に面談(写真下)し、お見舞いを述べるとともに、支援内容を説明いたしました。生徒たちの被災状況は、自宅の全壊・半壊にとどまらず、地震の影響で両親が職を失った方、重い病気になられた方、中には母親を亡くされた方もいらっしゃいましたが、JELAからの学費支援に感謝してくださいましたので、ここに謹んでご報告申し上げます。



世界の子ども支援

チャリティコンサートで熊本地震被災者を支援

5月7日から6月12日にかけて、真野謡子さん(ヴァイオリン)と前田勝則さん(ピアノ)による「第13回世界の子ども支援チャリティコンサート」を全国七つの日本福音ルーテル教会(松本、大森、岡崎、沼津、熊本、宇部、保谷)で実施しました。

真野さんと前田さんはこのチャリティコンサートに初出演でした。そもそも、公共のコンサートでの共演も初めてだったのですが、お二人とも山口出身ということもあり、息の合った演奏と楽しいトークで会場を盛り上げてくださいました。真野さんの地元・宇部でのコンサートは、近くに住む親族はもちろんのこと、ローカルメディアからも注目を浴びました。

このコンサートは毎年、JELAが行っている世界の子ども支援プロジェクトのために開催していますが、4月に発生した熊本地震を受け、今年はコンサートで頂く席上献金すべてを、被災された青少年とご家族のために捧げることになりました。

余震が続いていることから熊本教会でのコンサートは開催が危ぶまれましたが、地域の方々の強い要望で実施することとなり、5月21日のコンサート日は100人以上の方々が会場に押し寄せました。実は、演奏の途中で震度3弱の余震が数秒発生し、観客席からどよめきが聞こえ不安の顔も見られましたが、お二人は演奏に集中していたため、気が付きませんでした。演奏が終了し、次は地元の方たちのために民謡「おてもやん」を特別に演奏すると発表すると、観客から拍手が起き、笑顔も戻りました。

今回のツアーの来場者総数は約700名、席上献金総額は66万円でした。皆さまのご協力とお祈りに感謝いたします。



5月7日(土)松本教会



5月22日(日)宇部教会



5月8日(日)大森教会



6月12日(日)保谷教会



5月14日(土)岡崎教会



5月15日(日)沼津教会



5月21日(土)熊本教会

インド・ワークキャンプ 2017 近日参加者募集します!

期間：2017年2月9日(木)～19日(日) 11日間

※都合により、予定変更の可能性がありえます。

対象：18歳以上の健康な方(高校生不可)

定員：10名

※人数調整のため選考があります。

参加費：18万円



●JELA 役員の紹介

3月28日の一般社団法人日本福音ルーテル社団社員総会で次の方々が役員に選出されました。任期は2年後の定時社員総会までです。なお、新役員選出後にもたれた臨時理事会で、理事の互選により森下博司が理事長に選出されました。

理事：森下博司(理事長)、長尾博吉(常務理事)、古屋四朗(常務理事)、森川博己、中川浩之、浅野直樹、松岡俊一郎、今井哲男、杉本洋一

監事：安藤淑子、中山格三郎

(順不同)

●JELA の活動を支える職員たち

(後列左より)森川博己、下川正人、星崎ポール、奈良部慎平、(前列左より)渡辺薫、関口美香、市川あゆみ



第7回川柳ひろば入選句発表

下の三句が選ばれました(柏木哲夫・選)。近日中に景品をお送りします。とんちゃんさんの最優秀賞は2回目ですね。おめでとうございます。皆さんもどしどしご投句ください。

<最優秀賞>

これいいね本当ねいいねどうでもね
(とんちゃん)

<優秀賞>

空腹で聖餐のパン多く取る
(マルセリーノ)
みなスマホ赤ちゃんだけがこちら見る
(青きドナウ)

今回の投句分には以下のような佳作もありました。(選者・川柳ひろば管理人。柳名略、景品なし)

・やれることすべて健康次第です

●ご挨拶 …………… 理事長 森下博司



10年の長きにわたって理事長として日本福音ルーテル社団の発展に尽くされた中川浩之氏の後任として、そ

の務めを引き継ぐことになりました。前理事長のお働きに心より感謝申し上げます。

私はもとより微力ではありますが、社員・理事・監事の皆様、事務局職員の皆様のご協力をいただき、この社団が培ってきたビジョン、ミッションの実現に力を合わせて努力していきたいと思ひます。また引き続き日本福音ルーテル教会(JELC)、米国福音ルーテル教会(ELCA)のご支援をいただきながらJELAの働きが、国内外を問わず多くの方々にご関心、ご理解を得られるべく広報にも努めたいと思ひます。

皆様方には今後ともいっそうのご支援、ご協力をお願い申し上げます。

(2016年2月1日～5月31日)

安藤淑子/池田賢治/今谷悦郎/五木東京エミ・チチ/遠入美智子/大石千絵/大石敏和/大河原留美/大谷忠雄/大塚眞佐子/大嶺裕司/可代・十六夜/神谷智子/河合英子/金銀淑/京谷信代/JELC釧路教会/倉知延章/小島拓人/齊藤正恵/坂根信義/佐々木純子/鈴木辰典/鈴木やす/聖望学園(マカビ-カ)/高尾亮/高橋寿子/高橋悠美子/高橋要子/武井順太郎/武田光世/田中淑子/JELC玉名教会/田山かほる/轟木信二/中川浩之/中島望/中山純郎/奈良部慎平/西千恵/JELC浜松教会/早瀬康平/東貴也/廣幸朝子/藤井真理恵/堀江亀子/南節子/牟田青子/森保宏/山根順子/山田英美子/山本了/若原奇美子/渡辺薫/他匿名複数

以上、順不同・敬称略。ご支援ありがとうございます。
匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集余話

吉永小百合さんの原爆詩朗読の伴奏をしたキャロルさんの記事(前号)をお楽しみいただきましたでしょうか。実は私もこの関係で、何度か吉永さんと接する機会に恵まれました。初対面となる東京でのリハーサル終了時には、キャロルさんと私の席まで吉永さんが飲み物やおしぼりを運んでくださり、いろいろ話しかけてくださいました。吉永さんが「親族に牧師がいて、外国で奉仕しているんですよ」とおっしゃったとき、親近感を覚えたものです。長崎での朗読会が無事終わり、空港で帰りの便を待つ間、吉永さんサイドの打ち上げにも加えていただきました。個室におられた吉永さんが私たちのテーブルに顔をお出しになり、キャロルさんと英語で親しげに話されたのも嬉しい出来事でした。たった数日のことですが、吉永小百合という「国民的スター」の気さくで心やさしい一面にふれることができたのは、貴重な体験でした。(M)



ホームページから寄付ができます！

JELAの活動にご支援を！
各種献金のご送金は下記をご利用下さい。

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26

Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523

Email: jela@jela.or.jp

HP: http://www.jela.or.jp

郵便振替口座番号: 00140-0-669206

加入者名: 一般社団法人日本福音ルーテル社団